

## 放射線および原子力防災に関するコミュニケーションの調査

Survey outcome of the public communication about radiation and nuclear disaster prevention

\*大磯眞一

(株)原子力安全システム研究所

福島第一原子力発電所事故後、放射線に対する不安や関心が高まっている。そのような中で、放射線および原子力防災に関する知識の普及、理解促進に資することをねらいとして、コミュニケーションの調査を行った。

**キーワード：**福島第一原子力発電所事故、放射線、原子力防災、質問紙調査、コミュニケーション

### 1. 緒言

平成 27 年 11 月から 12 月に、関西地域における成人男女 1,028 人を対象に訪問留め置き方式で質問紙調査を行ったので、平成 24 年度および平成 26 年度の結果との比較を含めて報告する。

### 2. 結果

#### (1) 放射線関係

放射線に対して不安に思っている人は 7 割を占め、女性の方が不安に思う人が多い（男性：64%、女性：77%）。年齢別では、年配の人の方が不安に思う人の比率が高い。

放射線に関する基礎知識は平成 24 年度と比べ大きくは変わっていないが、低下しているものもある。とくに外部被ばく・内部被ばくの知識がある人の比率が低下している。

自然放射線の存在を知っている人は 6 割強であるが、男性の方がその比率が高い。また、年配の人の方が知っている比率が高い。自然放射線の存在を知っている人の中でも、その量を知っている人は 1 割強に過ぎない。

放射線に関する情報で役に立ったと思われる方法としては、テレビのニュース・番組、新聞をあげる人が多い。原子力発電施設等立地隣接地域においては、地方自治体の広報誌や、講演会・シンポジウムをあげる人もそれ以外の地域より多い。

#### (2) 原子力防災関係

原子力施設での事故の際に放射線から身を守る方法に関する知識については、平成 24 年度より低下している。また、屋内退避関係の知識がある人は少ない。

原子力災害について不安に思う理由としては、起これば自分に害があるかもしれないから、および、逃げられないかもしれないから、という人が多かった。原子力発電施設等立地隣接地域においては、この 2 つの理由をあげる人がとくに多く、それ以外の地域との比較で有意差があった。

### 3. 考察

#### (1) 放射線関係

外部被ばくと内部被ばくについての知識は原子力災害時に重要であり、今後、一層の情報提供が必要であると考えられる。また、自然放射線の存在を知っている人を年齢別にみると、若年の人では 5 割弱と比率が低いことから、学校教育などによる次世代層への知識の普及が課題である。

#### (2) 原子力防災関係

屋内退避関係の知識がある人が少ないため、屋内退避時はドアや窓を閉め、換気扇も使用しないなどの知識の普及が必要である。また、逃げられないかもしれないという意見が多いとの結果があり、「緊急事態の発生から、放射性物質が放出される、あるいは防護措置が必要なレベルに空間線量が上昇するまでには時間があること」への理解や、避難が必要になった際の対応に関する知識の普及を図っていくことが、今後の課題であろう。

\*Shinichi Oiso

Institute of Nuclear Safety System, Incorporated